

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15H03477

研究課題名（和文）授業実践学の文化的基底に関する比較開発研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Cultural Foundation of Teaching:

研究代表者

サルカルアラニ モハメドレザ（Sarkar Arani, Mohammad Reza）

名古屋大学・アジア共創教育研究機構（教育）・教授

研究者番号：30535696

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、国際比較授業分析の方法を開発しながら、グローバルな現代社会におけるペダゴジーの文化的基底の様相とその機能を解明することであった。各国のペダゴジーにおけるローカル知・理論とグローバル知・理論の検討・比較の結果を基に、学習デザイン、授業観、教授法、教師観、教授技術などを基礎とした研究成果から、授業実践の背後にある心象、価値観、信念や習慣化された行動様式、およびそれらの相互関連の構造を明確にした上で、ペダゴジー・コレクトネスの構築を検討し、よりよい社会の顕在化のためのペダゴジーの働き・役割と文化的基底（cultural foundation of pedagogy）を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宗教、言語、教育制度、学校文化の異なる様々な国を研究対象としたことで、トランスカルチャルな問題を明らかにできる。実証的な検証を基礎にした比較開発研究、特に国際比較授業分析にある。教えるということは「何であるか・何であるべきか」を国際的なディスコースと日本的なディスコースを結びつけることができる。

具体的に、国境を越えてトランスナショナル・ラーニングの解明に向かう基礎を築くところに、本研究の意義はある（ローカル知とグローバル知が結びつく）。例えば、アクティブ・ラーニングの学校文化の創造や知識の活用は、日本において焦眉な教育課題であるが、これは形を変えて他国にも存在している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a comparative research design as a lens for deep understanding of cultural foundation of teaching, especially what goes on in the classroom as praxis. Emphasis is here placed on transnational lesson study and cross-cultural lesson analysis as well as transnational learning for designing 'science of improvement' and authentic pedagogy. The findings are intended to clarify the communication approach used in the classroom (speaking/listening/memorizing; writing/reading/noting), teaching materials, teacher agency, classroom climate regarding mistakes, meaning of quality of learning, teaching and teacher, cross cultural analysis of pedagogy that drives customised teaching for personalised learning etc. This study pays greater attention to the larger stakeholder of the teaching and pedagogical function and learning process, those who are directly involved in the learning, namely, the students.

研究分野：社会科学

キーワード：ペダゴジー ペダゴジカル・コレクトネス 比較授業分析 授業の文化的スクリプト 授業研究 ペダゴジー・アクロス・カルチャーズ 授業分析 ティーチング・スクリプト

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

過去数十年間の授業研究や教師教育の研究動向をとらえれば、次の変化が起きている。まずは、教師 (teacher) 個人の力量形成の視点から授業実践の指導法 (teaching) 改善の視点へと推移してきた。すなわち、授業実践と切り離された脱文脈的な研修への参加が専門性の発達 (professional development) のために重視される現職教育から具体的な教室での授業指導法の改善を目指す授業研究へとという流れが起きている。このような〈人〉から〈こと〉への力点の変容はまた、教えること (teaching) の本質を、学習者 (learner) 中心の授業観から問い直し、学習者が学ぶこと (learning) の事実を見据えようとする授業研究の世界的な再評価へと推移してきた。

加えて、現在では、ラーニング・コミュニティ (ヴァリエーション・セオリーを含む) の視点が重視されている。そこでは、学習観・授業観の変容と、教師教育観の変容を同時並行的に起きている。授業を通じた学び合う学校づくりをめざすものとして、アクティブ・ラーニング、ダイアロジック・ティーチング、挑戦的なインストラクションなどの実践的な授業改善の取り組みが、個人レベルでも、授業レベルでも、学校レベルでも、地域レベルでも広く行われるようになった。そして、それを実現しようとする教師集団によるアクティブ・ラーニングの学校文化の形成を通して、教師同士で協働的に振り返ることによって自分の授業を見直す力や実践的な力量を向上させることになっている。

このような授業研究への高い期待の一方で、日本と海外の学校の現状に目を転じれば、時代の推移と共に授業研究が形式化・形骸化し、必ずしも個々の教師の力量や組織としての学校の教育力の向上につながらないという問題点も指摘されている。なぜなら、授業で起きる大部分のことは、あたかも‘DNA’が作用しているかのように、文化的コードによって決定づけられ、表面的に観察可能な事実をもとに改善を図ろうとしても、いずれ限界がある。むしろ、無意識の内に作用し、授業の深層において機能している文化的基底をとらえ、そこに関連付けながら授業のあり方を明らかにしていく必要がある。しかし、ペダゴジー (教えるということ: the art, science & craft of teaching) の文化的基底について解明はなされていない。そのために、ペダゴジーの文化的基底を解明するには新しい研究手法を実施することが重要である。そこで、事実 (エビデンス) を基づく比較授業分析を通してナノ・ミクロな実証的研究を必要とする。

### 2. 研究の目的

本研究では、国際比較授業分析の結果に基づき、観察可能な授業の様式から、背後にある心象、価値観、信念や習慣化された行動様式といったティーチング・スクリプトを明らかにし、文化複合の観点 (conglomerate view of culture) からの分析にもとづき、授業の文化的スクリプトの複合的構造を解明することを目的とする。授業の様式には、例えば、教授技術 (板書・デジタル黒板)、コミュニケーションスタイル、知識活用、授業形態、授業規律などが含まれており、それらは文化的基底によって価値づけられ、教師の行為や意思決定において選択される。またそれぞれの様式の効果の作用の仕方にも、文化的基底が影響しており、例えば「音声」を重視する文化か、または「文字」を重視する文化かにより相違が見られる。そこで本研究では、多数の国の授業事例の比較分析に基づき、ティーチング・スクリプトの影響の実態と程度を明らかにすることで、ペダゴジーの文化的基底の様相とその機能を明確にする。ただし、授業実践の表面的な違いであれば容易に解明できるが、本研究が対象とする文化的な要因や特徴は、自国の教師や研究者ほかにとって自明なことと映るために、顕在化が困難である。そこで、互いに異なる国の教師・研究者ほかによる比較授業分析会を開催し、分析視点や分析結果の違いから、これらを明らかにする。例えば、授業中に生徒の言語活動や知識活用がどのように形成されるかについては、その文化における知識およびその活用の基本的考え方が影響していると予想される。こうした潜在的な背後要因を中心に、世界諸国の伝統と文化に根ざしたペダゴジーの文化的基底の様相とその機能を解明する。

#### 2-1. 研究の課題

本研究の目的を達成するために以下の研究課題を設定する。

- ①比較文化論的アプローチに基づく比較授業分析という手法を通して、授業の文化構造 (根拠/文化的基礎づけ) を解明する。
- ②ペダゴジーの文化 (culture of pedagogy) としての口話文化 (オーラル) あるいは書字文化 (リテラル) の相違が、授業実践における行為選択の方針に与える影響を考察し、暗黙的に構成された信念のまとまりをとって顕在化する。
- ③諸国に対する比較授業分析を通して、文化複合の観点からの分析にもとづき、授業の文化的スクリプトの複合的構造を解明する。
- ④授業実践学の研究方法として新たな比較研究手法を開発し、ペダゴジー・アクロス・カルチャーズの特徴を明らかにする。
- ⑤ペダゴジカル・コレクトネス (教授学的正当性) を構成する要因を明らかにするために、を文化論的アプローチに基づく比較授業分析という研究手法を通して優先される価値観や選好の偏りを明らかにし、諸国の授業の文化的構造を解明する。

⑥ペダゴジーが文化的に(culturally)よりよい社会創りの持続可能性寄与するに(よりよい社会の顕在化)ための機能(function)を解明する。

⑦以上の分析の結果に基づき、授業実践の背後にある心象、価値観、信念や習慣化された行動様式(ペダゴジーに深く関わるもの)を分析し、研究課題の相互関連の構造化を通してペダゴジーの文化的基底の様相とその機能を総合的に明らかにする。

## 2-2. 研究の意義

①宗教、言語、教育制度、学校文化の異なる様々な国を研究対象とすることで、トランスカルチャルな問題・課題を明らかにすることができる。

②海外の授業の比較分析によって、国境を越えてトランスナショナル・ラーニングの解明に向かう基礎を築くところにある(ローカルの知とグローバルの知が結びつく)。例えば、知識の活用は、日本において焦眉な教育課題であるが、これは形を変えて他国にも存在している。

③ナノ・ミクロな実証的な検証を基礎にした比較研究方法、特に比較授業分析を開発提案する。

④教えるということは「何であるか、何であるべきか」について、国際的なディスコースと日本的なディスコースを結びつけることができる。教育の思想や教授・学習の目的・内容・方法・評価を融合するペダゴジーの構築に向けて、個人と社会(人間)、ローカルとグローバル(空間)、問題と展望(時間)を、統一的に把握する。

⑤教師教育(教員養成・現職教育)における新たな方法論的提案の可能性を有している。

⑥授業論や授業研究の過程(research & theory in practice)を通して教員の意識の変化を基に、教員同士も学び合うアクティブ・ラーニングの学校文化を創る。

⑦「改善の科学」(science of improvement)を授業実践学の持続的な質的変化(authentic pedagogy)として開発する。

## 3. 研究の方法

文脈を重視する研究では、文脈に固有な豊かな知を生み出すことができる反面、それらは研究者等のローカルなコミュニティの内部に閉ざされてしまうという問題も孕んでいる。さらに、省察が事実の認識のレベルにとどまりがちであり、事実の背景への深い洞察にいたるとは限らない。そこで、本研究では、新しい研究手法を開発し、事実(エビデンス)にもとづく「授業研究」の利点を生かしながらも、より深い省察の機会を積極的に提供し、「文化を超えた学習」を促進する研究方法として、「授業の詳細な記録にもとづく国際比較授業分析」を提案する。その手順は次の通りである。①授業を記録し、②同国で分析し、③異国でも分析し、④分析結果を比較し、⑤個々の文化的実践の固有性を考慮して、典型化や平均化によるのではなく、異質性の交流によって、ペダゴジーの背後にある文化的基底の様相とその機能を明らかにする。

## 4. 研究成果

### 4-1. ペダゴジーの文化的基底の様相とその機能の解明

本研究で追究する授業実践学(ペダゴジー)には、教えることの原理的な追究と具体的かつ現実的な授業実践の提言の統合が学問的に要請される。そのため、授業実践の事実(エビデンス)に基づく国際比較授業分析により、ペダゴジーの背後にある文化的基底の様相とその機能の解明を進めてきた。それらの結果から、授業実践の事実の背景をより深く省察する際、異なる文化的背景を有する者のレンズを通すことによって、自明である文化的コードを抽出することが可能となり、さらに考察(討論)を通して文化的スクリプトを明らかにすることで、「文化を超えた学習」の可能性を示してきた。文化的スクリプトの解明は、文化複合としての授業という事象の理解を目ざしているため、複数スクリプト間の優劣や影響力の大小は問題としていない。すなわち、併存しているという点で、すでに授業の多層的な構造の理解には寄与する。ただし、単なる併存を越えて、二つのスクリプトの協調的あるいは競合的な関係も観察される。一つの特徴的な事象(文化的コード)が、複数の背景(文化的スクリプト)の影響を受けている。例えば、国際比較授業分析の結果(マレーシアと日本)を手がかりにして、学習者の「理解と評価」に対する教師の対応を中心にしながら、海外と日本の授業に見られる文化的基底が顕在化する。マレーシアでは教師は教室での「間違い」を奨励しながら、その「間違い」から「理解」の定着や深化を図っておらず、日本の教育者には不足感を感じさせることがある。ただし、マレーシアの授業を仔細に分析すれば、教師が「理解」を重視していないわけではなく、ICTを活用し、集合における記号による表記と、それに対応する領域の図示を関連づけて理解できるような工夫がなされており、日本においては一般的な指導法から離れていても、一人ひとりの理解を重視する「主体的、個別的、構成主義的スクリプト」によって授業が進められていることが観察された。つまり、具体的教授行動の点では両国の教育者に違いはありながらも、スクリプトにおいては共通していると判断できるいっぽう、授業を計画的に進めなければならないという「制度的スクリプト」と、一人ひとりの理解を重視する「主体的、個別的、構成主義的スクリプト」が競合という、教師の置かれている矛盾や葛藤もスクリプトによって明らかにすることができた。

### 4-2. 授業実践の社会文化性と教師の力量形成

授業実践の社会文化性を前提としつつ、教師の力量形成は、時代を超えた重要な課題である。

しかし、教師の力量は、現場を離れた研修だけで身につけることは困難である。教師が意識を変えたり、研修会や書物等を通して教育方法を身につけたりしても、それが実践そのものの変容につながらないことが指摘されている。つまり、教師が変わっても、それが授業実践の質の向上に必ずしも結びつかない。すなわち、新しい理論を理解しただけでも、新しい方法論や手法を手に入れただけでも、授業を改善することは困難である。理論と方法・手法を結びつけるアプローチと、そのアプローチが有効に機能する社会的・文化的要因が鍵を握っている。それぞれの固有の文化に根ざし、理論と方法論・手法を架橋するために暗黙知としてのアプローチを独自に生み出していく必要がある。例えば、マレーシアの教師は、授業の中では、個別に課題に取り組みさせた後に、優秀者にチョコレートを渡している。学習の成功の報酬としてチョコレートをとらえれば、「競争的・個別的・行動主義的スクリプト」が作用しているといえる。しかし、「なぜチョコレートを褒美に与えるのか？」と考えれば、教師-生徒という評価する者-される者という立場を超えた、励ましや愛着といった「家庭的スクリプト」が反映しているといえる。日本と見比べると、マレーシアでは、こうした例が多々見られるようであり、またチョコレートを受け取った生徒も一人で食べるのではなく、仲間と分け合って食べることは一般的であるとのことである（動機付け・報酬としてのチョコレート）。教師が生徒に報酬を与えることによって競争に駆り立てることは、格差の固定や差別意識の助長を生みかねない。この点においては、コレクトではないといえるかもしれない。しかし、マレーシアにおいてはチョコレートが愛着や共有のコードとしても作用していると考えられ、文化から切り離して行為（教師がチョコレートを報酬に用いる）のみに焦点を当てて是非を論じることは妥当とはいえない。

#### 4-3. レッスン・スタディから新たな教育学理論を構築する可能性

教育学や心理学、社会学、情報科学などの学問状況の変化のもと、本研究を通して、「Research on Teaching」としての日本型レッスン・スタディの可能性と再構築するための課題が明確になった。新しい理論の理解だけでも、新しい方法や手法（ツールズ）だけでも授業改善は困難であり、ペダゴジカル・コレクトネス（何が教授学的に正しいと言えるのか）の探究においては、理論と方法・手法を結びつける「アプローチ」が鍵となる必要がある。すなわち、理論は理論のみでその正当性を主張することもできず、方法・手法もそれ自体によって正当性を主張することはできない（マレーシアの文化的コードとしてのチョコレート）。そして、両者を架橋すべきアプローチは社会文化的なものであり、当事者には自覚されにくいいため、国際比較研究、特に比較授業分析によって相対化することの必要性が主張される。すなわち、「改善の科学」としてのレッスン・スタディから、新たな教育学理論の構築の可能性が生み出される（from the primacy of practice to the primacy of theory）。このような課題を探究することの背景として、「学びの場のデザイン」を本来的意義とする teaching や「学びの場のデザイナー」を本来的任務とする teacher をめぐる課題として以下の点が浮上してきた。

- ①授業研究において teacher (who - 人 -) から teaching (what - こと -) へと「問い」の対象を見直すこと、また、答え・理解・解決などを探す (questions like how) ことよりも、問題を発見すること (problem-finding 力・質問力 - questions like why -) を重視すること。
- ②授業実践の事実に基づく研究が、教育学理論の再構築に発展する可能性を生み出すこと。
- ③Data から information、また knowledge を経て wisdom を導く研究へと深化させ、授業実践の「事実」を基にした政策立案・見直すこと（表層的な Evidence-Based Policy Making から、専門職の洞察を基盤とする Making Our Own Choices with Wisdom へ）。
- ④Research 'on' practice から research 'in' practice へと探究の取り組みを質的に変容させること。
- ⑤「事実」(Evidence: "How do we know what we know? Is our information reliable?", Newmann and Associates, 1996, p. 132) の批判的受容を基にして research design を見直すこと。
- ⑥比較授業分析により授業実践の基底にある「暗黙的」な知識にもとづいて理論を構築すること (cross-cultural analysis for recognizing 'tacit' theory of knowledge underlying practice)
- ⑦「改善の科学」として、pedagogical correctness の探究を基にしたペダゴジーの本質的再構築と教師の資質向上 (from 'chalk and talk' to 'guide on the side') を可能とするレッスン・スタディを再構築すること。

#### 4-4. 国際比較授業分析方法の開発

本研究では、新しい比較研究手法を開発し、授業実践の事実（エビデンス）にもとづく、より深い省察の機会を提供し、「様々なアカデミック・カルチャーを超えた学習」と授業実践の文化的基底の解明や授業実践学の構築を可能にする研究方法として、国際比較授業分析を提案した。ここでいう「比較」は、所与の共通尺度により測定し結果を比較するという方法ではなく、同じ事象をそれぞれの観点（すなわち「レンズ」）から評価しその相互の差異から暗黙の価値観を顕在化するという方法である。すなわち、典型化や平均化によるのではなく、異質性の交流によって比較を行う。まず、複数の研究でのエビデンスで示された知見にもとづき明らかになった各国の「レンズ」を相互に比較検討し、単なる情報の羅列ではなく、統合的に分析可能な枠組みを見出す。それにより、新たな視点や関係性を提示する。さらに、その枠組みに基づいて、各研究で

考察された知見を再整理する。最後に、実践への示唆として、他者の「鏡」で自分たちを見直す（レンズとしての比較授業分析）。生み出された授業実践の事実の背後にある原理に気づくことで、相対化し、文化的影響を自覚化して、授業実践を検討し、文化的に妥当な実践を構想することが可能となる。

具体的には、教室空間における一つ一つの発言・行動という「ナノ：教室」レベルから出発し、「ミクロ：学校」、「メゾ：地域」、「マクロ：国」、「ギガ：国際」というレベルを引き上げながら比較研究を行い、「グローバル」レベルでの知見 - 科学知 - を構造化する。そこで、まず、個々の国・地域で、①ナノレベル：授業を観察・記録し、②ミクロレベル：同国の学校で検討・分析する。そして、③メゾレベル：異なる国の教育者・研究者が授業とともに検討会での検討内容も分析する。さらに、④マクロレベル：分析結果を多国間で比較し、それらの成果をもとに、⑤ギガ・グローバルレベル：個々の国・地域の文化的実践の固有性を考慮して、授業実践の背後にある文化的基底とその質向上の様相とその機能を解明し、さらにアジア地域以外の諸国との知見の交流により、グローバルな現代社会におけるペダゴジーの文化的基底の様相とその機能を解明する。特に、④や⑤のレベルの国際比較授業分析の知見を統合的に再分析する際には、データ分析の枠組みとして、批判的解釈学的 *synthesis approach* を用いる。*Synthesis approach* とは、先行研究をレビューするだけでなく、一般化を創出する目的で複数の実証研究を統合するものであり、問題の定義、研究のエビデンス収集、研究の方法と実施の対応及び、統合の望ましい推測を評価、個別の研究からエビデンスを統合し分析、蓄積されたエビデンスを解釈し、方法と結果の統合を提示するという6ステップを有するものである。このアプローチでは、反復的に文献検索と選択を行って、メタ理論的なレビューを行う。例えば、イランと日本の比較からは、学問の権威や教師の権威を重視し、計算手続きなどの近代的能力を育てようとするイランに対して、日本は、学問や教師より、子どもの独自の考えが出ることを重視し、ポスト近代的能力に目を向けている点等が示されている。また、シンガポールは子どもに対し、知識活用あるいはビジネススキルを育てようとする傾向が強いが、イランは学問を教えるという傾向が強い点が示され、一方で、日本は、子どもを重視している点が示された。特に日本は子ども同士の横のつながりの強さを歴史的に保持していることが本研究からも示唆されている。

#### 4-5. 今後の研究課題

OECD「Education2030」によると、現代社会は高度情報化やAIの進化による職業の刷新など、Society5.0に突入する2030年における国際的な課題解決に向けた新しい教育・学校・教室・学習・データサイエンスのアプローチを探っている。そのようなグローバルな社会の変化への対応に即して、教育学を通じた学び合う学校づくりをめざすものとして、バリエーション理論や学習科学と教育工学の有益な関係、AIとBig Data Analyticsの取り組みが、ローカルやナショナルレベルでも広く行われるようになった。しかし、グローバルな教育課題に対応するためのナショナルあるいはローカルの取り組みは、必ずしも成功しているとは言えない。ソリューションとしてのグローバルに通用する理論や知見であっても、それが適用されるアプローチはローカルの文脈に適応 (*appropriation*) していなければ機能しない。したがって、ペダゴジーの解明のためには、文化的として授業実践の深層に埋め込まれており、直接的に意識し抽出することは困難な文化的基底を考慮する必要がある。そこで、本研究の成果の一部としての今後の課題は、微視的な授業分析と、構造的な比較研究のアプローチを採用し、特に、教育実践を本質的に方向付けている文化的基底の主要因として、教育実践者やステークホルダーが暗黙に有するペダゴジカル・コレクトネスの解明を行うことである。ペダゴジカル・コレクトネスは、教育実践学や教授行動の選択や教育実践に関わる政策決定に左右されるが、単なるルールではなく、複雑な要因の複合体 (コンゴロマリット) として存在している。

今後の研究課題は、*utility* の着想、*accountability* の発想、*responsibility* の構想、*morality* の思想の4つの段階的観点から解明することである。つまり、*utility* の着想では、例えば定められた目標達成のための効果的で実用的な方法の効用を問題とする。また、*accountability* の発想では、組織体や共同体が制度として営む事業の評価や適切な資源配分の妥当性について問題とする。また、*responsibility* の構想では、外的には当該のステークホルダーを超えた社会全体に対して、また内的には自分自身の良心に対して、自分の立場・権限・義務に応じた意図・行為および結果の是非について問題とする。*Morality* の思想では、社会、文化、世代を超えた人間一般、さらには人類を超えた自然に対する倫理について問題とする。このような4つの段階的観点は、本研究でのペダゴジカル・コレクトネスに引き寄せて言えば、専門職としての教職の倫理や、学校教育の公共性の段階に対応している。しかし、ここでいうコレクトネスを、文化や文脈を超えて通用する静的な正解として見出すことは容易にできない。一方では、主体化、すなわち、個の学びや人間形成 (*being humane*)、もう一方では、社会化、すなわち文化適応や人材育成 (*human development*)、の2つのベクトルの動的なバランスをどう図るのかに教育実践上の難題があり、その理論的根拠を明らかにするのがペダゴジカル・コレクトネスである。そのために、本研究の成果の一部として今後の研究課題は、ペダゴジカル・コレクトネスの学際的定義を定着化し、ナノレベルから事実に基づく国際比較授業分析手法を通して、ミクロ・メゾな実証的研究を基に学際的国際研究 (マクロ・ギガレベル) という新たな比較研究の展開が考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 9件/うち国際共著 6件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Mohammad Reza Sarkar Arani; Bruce Lander; Yoshiaki Shibata;	4. 巻 54
2. 論文標題 From “chalk and talk” to “guide on the side”: A cross cultural analysis of pedagogy that drives customised teaching for personalised learning	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 European Journal of Education	6. 最初と最後の頁 233-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ejed.12340	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Sarkar Arani, M.R.	4. 巻 16
2. 論文標題 Shared Teaching Culture in Different Forms: a Comparison of Expert and Novice Teachers' Practices	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Educational Research for Policy and Practice	6. 最初と最後の頁 235-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） DOI 10.1007/s10671-016-9205-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Sarkar Arani, M.R., Shibata, Y., Sakamoto, M., Iksan, Z., HaziahAmirullah, A., and Lander, B.	4. 巻 6
2. 論文標題 How Teachers Respond to Students' Mistakes in Lessons: A Cross-cultural Analysis of a Mathematics Lesson	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Journal for Lesson and learning Studies	6. 最初と最後の頁 249-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.1108/IJLLS-12-2016-0058">https://doi.org/10.1108/IJLLS-12-2016-0058</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Cheon, Ho-seong, Sarkar Arani, M. R., Shibata, Y., and Sakamoto, M.	4. 巻 22
2. 論文標題 Towards Possibility and Prospect of Cross-cultural Lesson Analysis-Focus on Methodology of Comparison as Lens-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Korean Journal of the Japan Education	6. 最初と最後の頁 107-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sarkar Arani Mohammad Reza	4. 巻 6
2. 論文標題 Raising the quality of teaching through Kyouzai Kenkyuu	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The International Journal of Lesson and Learning Studies	6. 最初と最後の頁 10-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://dx.doi.org/10.1108/IJLLS-07-2016-0018">http://dx.doi.org/10.1108/IJLLS-07-2016-0018</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Sarkar Arani Mohammad Reza	4. 巻 5
2. 論文標題 An Examination of Oral and Literal Teaching Traditions through a Comparative Analysis of Mathematics Lessons in Iran and Japan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The International Journal of Lesson and Learning Studies	6. 最初と最後の頁 196-211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://dx.doi.org/10.1108/IJLLS-07-2015-0025">http://dx.doi.org/10.1108/IJLLS-07-2015-0025</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 服部美奈	4. 巻 940
2. 論文標題 20世紀初頭のインドネシア・イスラーム社会における近代女子教育の形成 - 「正典」をめぐる解釈とコミュニティのゆらぎ・再編 -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 13 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sarkar Arani Mohamad Reza	4. 巻 4
2. 論文標題 Cross Cultural Analysis of an Iranian Mathematics Lesson: A New Perspective for Raising the Quality of Teaching	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 The International Journal of lesson and Learning Studies	6. 最初と最後の頁 118-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://dx.doi.org/10.1108/IJLLS-07-2014-0017">http://dx.doi.org/10.1108/IJLLS-07-2014-0017</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 坂本篤史・副島孝・水野正朗	4. 巻 11
2. 論文標題 学び合いの授業に取り組む小学校教師の授業観の形成：ナラティブ・アプローチによる事例分析	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 協同と教育	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計19件(うち招待講演 3件/うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Sarkar Arani, M. R; Bruce, Lander; Shibata, Yoshiaki
2. 発表標題 How Cross-Cultural Analysis of Lessons can Benefit Customizing Teaching
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies, 2019 (Symposium), Amsterdam, Holland (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sarkar Arani, M. R
2. 発表標題 Cultural Foundations and Views of Japanese Regarding Higher Education Pedagogy Quality, Evaluation and Faculty Development
3. 学会等名 The Second International Conference of Quality Assessment in Universities Systems, Shiraz Iran (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sarkar Arani, M. R
2. 発表標題 Japan from the Lens of Comparative Education Studies: In Search of Change-oriented Reform
3. 学会等名 Second International Conference on Comparative Education, Kashan, Iran (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 サルカール アラニ モハメッド レザ
2. 発表標題 Research on Teaching としての授業研究の可能性：理論、アプローチ、方法、ツールの視点を通して
3. 学会等名 日本教育方法学会 立ち55回大会 課題研究
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 水野正朗
2. 発表標題 効果的な授業デザインとカリキュラム改善における創造性サポート：モンゴルにおける授業研究事例を例に
3. 学会等名 日本カリキュラム学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sarkar Arani, M. R.; Bruce, L., Sakamoto, M. & Tan. S.
2. 発表標題 Classroom Climate Regarding Mistakes: A Cross-Cultural Analysis
3. 学会等名 American Educational Research Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 サルカール アラニ モハメッド レザ・久野弘幸・Norjin Dulamjav・柴田好章
2. 発表標題 授業逐語記録にもとづく比較授業分析-モンゴル算数授業における課題と概念理解の関係を中心に-
3. 学会等名 日本教育方法学会第54回大会(ワークショップ)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Sarkar Arani, M. R.; Gao, Y.; Lin, Y.; Zhao, W. et al.
2 . 発表標題 International Dialoge on Reconstraction the Cultural Script of Teaching
3 . 学会等名 World Association of Lesson Studies (Symposium) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Kuno, H.; Chichibu, T.; Sarkar Arani, M. R.
2 . 発表標題 How Lesson Study Supports School to Create Professional Capital in Practice: Lessons from Japan
3 . 学会等名 Educational Research Association of Singapore (ERAS) Asia-Pacific Educational Research Association (APERA) International Conference (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Sarkar Arani, M.R.
2 . 発表標題 Why Transcript-based Lesson Analysis
3 . 学会等名 11th World Association of Lesson Studies International Conference (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Lander, B. W., Sarkar Arani, M. R., Shibata, Y., Sakamoto, M., Zanaton, I., and Tan, S.
2 . 発表標題 What can We Learn from the Way Mistakes are perceived in the Classroom? A Comparative Lesson Study
3 . 学会等名 11th World Association of Lesson Studies International Conference (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1. 発表者名 サルカール アラニ モハメッド レザ・久野弘幸・坂本將暢・タンシャーリー・柴田好章
2. 発表標題 授業逐語記録にもとづく比較授業分析-マレーシア算数授業における教材観を中心に-
3. 学会等名 日本教育方法学会第53回大会プログラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂本篤史・柴田好章・サルカール アラニ モハメッド レザ
2. 発表標題 比較授業分析による授業実践の文化的基底の多面的検討 A Synthesis Researchを中心に
3. 学会等名 日本教育方法学会 第52回大会プログラム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 サルカール アラニ モハメッド レザ・久野弘幸・坂本將暢・柴田好章
2. 発表標題 授業逐語記録にもとづく比較授業分析-イランの小学校の理科授業における教師の発問と児童の思考との関連を中心に-
3. 学会等名 日本教育方法学会 第52回大会プログラム
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Sarkar Arani Mohammad Reza
2. 発表標題 Community-based Teacher Education: Toward an effective Design for Teaching and Learning in the Teacher Colleges
3. 学会等名 14 Annual Conference of Iranian Curriculum Studies Association (Keynote Speaker) (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Sarkar Arani Mohammad Reza
2. 発表標題 Possibility of Re-Orienting the Cultural Script of Teaching through Cross Cultural Lesson Analysis
3. 学会等名 9th World Association of Lesson Studies International Conference (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 サルカール アラニ モハメッド レザ・柴田好章
2. 発表標題 授業実践の文化的基底の解明のための比較授業分析の方法論
3. 学会等名 日本教育方法学会 第51回大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Sarkar Arani Mohammad Reza & Shibata Yoshiaki
2. 発表標題 The Role of 'Academic Research' in the Policy and Practice of Teacher Education: From and International Perspective
3. 学会等名 10th East Asia International Symposium on Teacher Education: Development of Teacher Education in the Global Era (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 サルカール アラニ モハメッド レザ・千鎬誠・久野弘幸・坂本将暢
2. 発表標題 授業逐語記録にもとづく比較授業分析-韓国の小学校における児童発言の相互関連を中心に-
3. 学会等名 日本教育方法学会 第51回大会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 水野正朗	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 368
3. 書名 『協同学習への教育方法学からのアプローチ（第6章 127-151頁）』、日本協同教育学会編 『日本の協同学習』	

1. 著者名 Sarkar Arani, M. R.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Meraat Schools That Learn Publisher, Tehran, Iran	5. 総ページ数 368
3. 書名 Lesson Study: A Global Solution for Improving Teaching and Enhancing Learning, Seventh Edition (Revised Fourth Edition)	

1. 著者名 Sarkar Arani, M.R.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Meraat Publisher, Tehran. Iran.	5. 総ページ数 352
3. 書名 Lesson Study: A Global Solution for Improving Teaching and Enhancing Learning, Sixth Edition (Revised Third Edition)	

1. 著者名 Sarkar Arani Mohammad Reza	4. 発行年 2015年
2. 出版社 Meraat Publisher, Tehran, Iran	5. 総ページ数 304
3. 書名 Lesson Study:A Global Solution for Improving Teaching and Enhancing Learning(Revised Second Edition)	

1. 著者名 柴田好章	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 233
3. 書名 「日本の授業研究と世界のLesson Study (第2章 19-33頁)」、日本教育工学会 監修 小柳 和喜雄 編著 柴田 好章 編著 『Lesson Study (レッスンスタディ)』	

1. 著者名 柴田好章	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 233
3. 書名 「シンガポールにおけるLesson Study(第8章 143-164頁)」、日本教育工学会 監修、小柳和喜雄 編著、柴田 好章 編著	

1. 著者名 Kuno Hiroyuki	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 222
3. 書名 "Japanese Progressiveism and Continuing Cultural Encounters" (Chapter 11, pp. 169-174), in: Yoko Yamasaki and Hiroyuki Kuno (eds.) Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan	

1. 著者名 Ishii Terumasa	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 153
3. 書名 "Historical Overview of Lesson Study" (Chapter 5, pp.57-72), in: Koji Tanaka, Kanae Nishioka and Terumasa Ishii (eds.) Curriculum, Instruction and Assessment in Japan:Beyond Lesson Study	

1. 著者名 Ishii Terumasa	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 153
3. 書名 "Various Methods for Organizing Creative Whole-class Teaching" (Chapter 7, pp.82-97), in: Koji Tanaka, Kanae Nishioka and Terumasa Ishii (eds.) Curriculum, Instruction and Assessment in Japan: Beyond Lesson Study	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石井 英真  (Ishii Terumasa)  (10452327)	京都大学・教育学研究科・准教授   (14301)	
研究分担者	坂本 將暢  (Sakamoto Masanobu)  (20536487)	名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授   (13901)	
研究分担者	服部 美奈  (Hattori Mina)  (30298442)	名古屋大学・教育発達科学研究科・教授   (13901)	
研究分担者	久野 弘幸  (Kuno Hiroyuki)  (30325302)	名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授   (13901)	
研究分担者	坂本 篤史  (Sakamoto Atsushi)  (30632137)	福島大学・人間発達文化学類・准教授   (11601)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	柴田 好章  (Shibata Yoshiaki)  (70293272)	名古屋大学・教育発達科学研究科・教授    (13901)	
研究 分 担 者	中島 繁雄  (Nakajima Shigeo)  (90711680)	帝京大学・教育学部・教授    (32643)	